

# 「外置」分析をめぐって

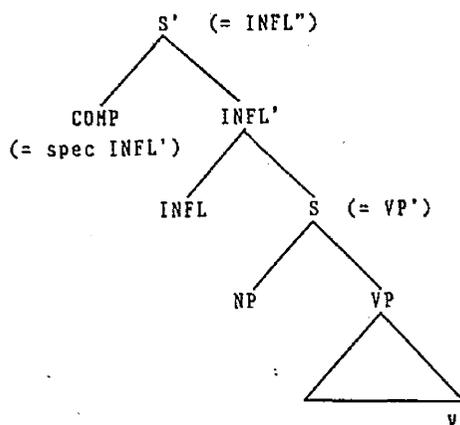
—Catholic Homilies に見られる従属節 SVO 語順—

加藤 敏 三

## 1. Kemenade (1987) の「外置」分析

GB 理論を背景にした古英語統語論の研究では Kemenade (1987) がその分量からいって代表的なものである。彼女は他のゲルマン語からの類推・古英語での不変化詞の分布などの理由から、古英語動詞句の基底語順を OV と仮定している。この仮定は彼女独自のものではなく、Allen (1975), Koopman (1985), Lightfoot (1979), Stockwell (1977) 等、(筆者は賛成しないが) 生成文法家が古英語の分析をする際には広く採用されてきているものであり、言ってみれば常識とされている観のあるものである。この仮定と共に、彼女は古英語が Verb Second 言語であるとの考えから、古英語の基底語順を(1)のようなものと考えている。

(1)



Kemenade の分析では補文化子 (complementizer) は INFL に生成される。これは、verb second 現象は補文化子の無い主節にしか見られない、という、ゲルマン語についてよく言われる補文化子と定動詞の相補分布関係を捉えるためである。(1)の COMP は verb second を示す節で節頭にくる要素と疑問詞の着地点である。さて、よく知られているように、古英語散文での基本的な語順は、主節で SVO (または XVSO)、従属節で SOV または SVO であった。これらの表面語順は彼女の体系では次のように派生される。主節においては補文化子が無いため動詞が INFL へ移動し、主語またはその他の要素が COMP へ移

動し SVO または XVSO という語順が派生される。従属節では補文化子があるため動詞は基底の位置に留まり、SOV 語順が派生される。それでは、以下で本稿の主題となる従属節での SOV の語順はこの体系ではどのよう派生されるのだろうか。

Kemenade は(2)のような例について次のように述べている。ただし下の引用の中で Kem-enade が “object constituents” と言っているのは、もちろん文字通りの目的語ではなく、X<sub>v</sub>bar-理論で言う補部 (complement) のことである。(尚、本稿では出典の略語は *A Microfiche Concordance to Old English* に従っている。)

- (2) a. same men cwepap on Englisc þæt hit sie feaxede steorra  
 some men say in English that it is long-haired star  
 'some people say in English that it is a long-haired star'  
 b. æfter ðisum gelamp þæt micel manncwealm becom ofer þære  
 after this happened that great pestilence came over the  
 Romaniscan leode  
 Roman peoale  
 'then it happened that a great plague came over the Roman people'  
 ((2)=her § 2.2 (58); a: ChronA (Plummer) (892), b: ÆCHom II, 122, 15)

In OE, any of these object constituents could be postposed to the right of the verb, as in (58) [our (2); KK]. (...) In a. an NP (*feaxede steorra*) is extraposed to the right of the verb, in b. a pp (*ofer þære Romanisce leode*). Examples of such extraposition are very numerous. (pp. 39-40)

...and suppose further that extraposition is adjunction to VP.  
 (p. 60)

つまり、従属節 SVO 語順は動詞以外の動詞句の要素を動詞の後ろへ「外置」してしまうことにより派生されるというのである。ここで問題なのは、ここで提案された「外置」の定式化はおろかその規則のメカニズムについても Kemenade 自身は上の引用以外は何も述べていない、ということである。このような操作に対して、Koopman (1985) は(3)の例を用いて次のような問題があることを指摘している。

- (3) a. buton ða lareowas screadian symle ða leahtras þurh  
 unless the teachers prune constantly the sins by  
 heora lare aweg (ÆCHom I, 96, 12)  
 their teaching away  
 'unless teachers prune away sins by their teaching'  
 b. buton ða lareowas [t<sub>i</sub>] [t<sub>j</sub>] [t<sub>k</sub>] [t<sub>i</sub>] screadian [symle]<sub>i</sub> [ða leah-  
 tras]<sub>j</sub> [þurh heora lare]<sub>k</sub> [aweg]<sub>i</sub>  
 ((3a, b) are adapted from his (19) and (20))

In (20), [our (3b); KK] an NP, and a PP, and a particle, 3 elements in all, have been moved to the right of the verb. (Exbraciation, see Stockwell 1977). This raises at least two important questions: (a) Which element is moved first?, and (b) Are the traces properly governed? I will not attempt to discuss these questions here. (p. 113)

(3b) の操作に対する批判は引用にあるように Kemenade に対して直接になされたものではないが、しかし批判の対象とされている exbraciation はもちろん「外置」分析と同主旨のものであることは明らかであろう。だからこれは「外置」分析にそのまま当てはまるものである。(尚、理由は不明だが Koopman は何故か副詞 *symle* を省略しているため、彼の引用文中の “3 elements” は正しくは “4 elements” である。) このような理由から、Koopman は従属節 SVO 語順の派生は、(4) のように動詞以外の動詞句の要素を動詞の後ろへ「外置」するよりも、(5) のように動詞だけを前置してその他の要素の移動は考えない方がよいと考えている。

(4) Kemenade 型

[vp... V] → [vp V]...

(5) Koopman 型

[vp... V] → V[vp...]

このような Koopman の批判は筆者にはおおむね正しいように思われる。(4) よりも (5) の方が比較にならないほどエレガントであるのは誰の目にも明かであるからである。しかし、筆者はそれだからといって (5) の派生法が正しいと考えているわけではない。筆者の考えによれば、古英語の語彙範疇は主要部・補部媒介変数に関して「無指定」であり、そのため語彙範疇である動詞句の主要部は (6) のどちらの位置にでも基底生成されることができた。

(6) 「無指定」仮説

a. [vp... V]

b. [vp V...]

もしこれが正しいとすれば、従属節 SOV 語順は (6a) の基底語順を持ち、一方従属節 SVO 語順も (6b) の基底語順から移動規則によることなく直接に派生されると考えることができる。本稿の目的は上の引用のように提起しただけでそれ以上論じていない Koopman の「外置」批判について彼を補う形で論ずるところにあり、(5) と (6) の優劣を論ずるというものではないため、(6) の考え方にはこれ以上深入りしないが、(6) を支持する証拠については加藤 (1989b)、Kato (1989) においてそれぞれ異なった観点から詳細に論じられているのでそれらを参照されたい。尚、もちろん (6) を仮定した場合 (5) と同様に「外置」は必要ではない。

## 2. 「外置」分析批判

前節において、Kemenade の「外置」分析とそれに対する Koopman の批判を見た。その批判の内容は (7) であった。

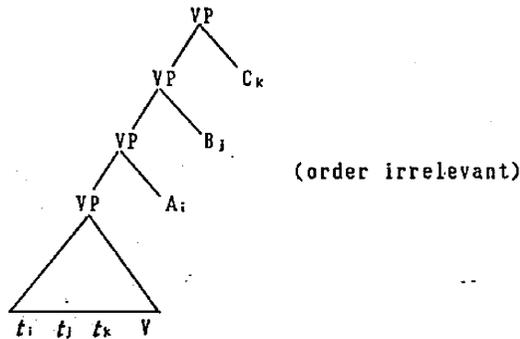
- (7) a. Which element is moved first?  
 b. Are the traces properly governed?

しかし上の Koopman の引用文で自身が言っているように、彼はこれらをそれ以上論じておらず、いわば「外置」分析は彼に問題外として軽く一蹴されているに過ぎない。筆者ももちろん「外置」分析は否定するものであるが、以下本稿ではこれらの批判が正しいものであるか、またこれら以外に「外置」分析を否定する根拠が無いか、という点について論じていきたい。

## 2.1 適正統率について

Koopman は(7b)で見たように「外置」によって残された痕跡が適正統率されないのではないかと述べているが、この点は必ずしも明らかではないように思われる。「外置」によってできる派生構造は、Kemenade は上の引用のように「外置」は動詞句への付加と考えているから(8)のようになるはずである。

(8)



Koopman は適正統率の定義を明らかにしていないが、Chomsky (1986) の体系では(8)で外置された要素がその痕跡を先行詞統率することを妨げるものはないはずである。というのは、(8)では先行詞は全て VP に “exclude” されていないからである。この構造は動詞句内からの（付加詞）移動である(9)と基本的に同じものであることに注意されたい。

(9) ... [VP t<sub>i</sub> [VP... t<sub>i</sub> ]]

関係する定義等については Chomsky (1986) を参照されたい。また、「外置」が統語論的操作ではなく文体論的操作であるためそもそも痕跡を残さない、という可能性も考えねばならない。Koopman は上の引用部分に付けられた注 (note 4) の中で、“Proper government of the traces may pose serious problems”と述べているが、いま述べたこれらの理由から筆者には (7b) よりも (7a) に関わる問題の方がより深刻であるように思われる。

## 2.2 「外置」の適用方式

先にも指摘したように、Kemenade は「外置」の定式化を行っていないため、この規則がどのように適用されるかは全く明らかでない。Koopman の批判は単に順序が分からない、

というより、より大きくこの点を批判したものであると受け取るべきであろう。本節ではこの点について、「外置」をどのように解釈してもそれは受け入れることのできない提案であることを示したい。

「外置」の適用法には (10a, b) に示した二通りの可能性があるように思われる。

(10) a. 個別方式

$$[VP [\alpha] [\beta] [\gamma] V] \rightarrow [VP V] [\alpha] [\beta] [\gamma]$$

b. 一括方式

$$[VP [\alpha \beta \gamma] V] \rightarrow [VP V] [\alpha \beta \gamma]$$

個別方式は動詞句内の動詞以外の要素を一つ一つ移動していく可能性であり、一括方式はそれらの要素を一度に移動する可能性である。以下、この二つについて考察していくことにする。

もし「外置」が (10b) のような一括方式であるならば、それが古英語の規則として実在する可能性は極めて少ないもののように思われる。というのは、この方式では移動するのは動詞句の要素のうち動詞を除いた全ての要素であるのだが、それらは当然構成素を成さないからである。またその事を承知の上でこの規則を主張するならば、それは非常に価値のないものとなる。というのは、その代案である Koopman の (5)、つまり構成素である動詞だけを移動する方式の方が価値が高いのは誰の目にも明らかだからである。だから、もし「外置」が古英語の規則であると主張したいのならば、「外置」が個別方式であることを示さなければならない。もし「外置」が個別方式であるとする、(10a) のように動詞句内の全ての要素を順次移動していく可能性と共に、ある要素は移動して別の要素は移動しない、という可能性が当然許されるべきである。もしこれが正しいとすれば、「外置」は一つまたはそれ以上の要素をそれらを直接支配する動詞句の外に移動する規則であり、たまたま動詞以外の全ての要素が移動された場合には (10a) のように SVO 語順となる、という新しい解釈が得られることになる。もしこれが正しいとすれば、一括方式の場合と違って「外置」を主張する価値はあるということになる。だから、個別方式の「外置」を仮定した場合、動詞句内の要素を全て移動する可能性、つまり (10a) のような SVO 語順と共に、ある一つの要素だけを移動して他は動詞句内に残っている可能性、つまり (11) のように動詞句の要素が動詞を伴っている語順が古英語に普通に見られるはずである、という予測をすることになる。

(11) a.  $[VP \alpha \beta V] \rightarrow [VP \alpha V] \beta$

b.  $[VP \alpha \beta V] \rightarrow [VP \beta V] \alpha$

それでは古英語の事実はこの予測通りだったのであろうか。筆者の調査によれば、Catholic Homilies I, pp. 2-294 のうち、従属節で、かつ動詞から  $\theta$  役割を受ける要素が二つ以上あり、かつそれらは人称代名詞ではない例文は 76 例あるが、それらの語順と例数は次のようであった。尚、ここで対象を人称代名詞を除く  $\theta$  役割を受ける要素に限った理由については加藤 (1989a) で詳細に論じられているので参照されたい。

(12) a.  $\theta \theta V \dots 22$

b.  $V \theta \theta \dots 51$

c.  $\theta V \theta \dots 3$

(12a-c) の例文を次に示しておく。尚、以下では真と行を例文の前に示し、現代語訳は

Thorpe のものをおおかたそのまま借用することにする。

- (13) a. 62:33 forðan ðe ge [eowre speda] [þearfum] *dældon*  
 'because ye distributed your riches to the poor'  
 b. 124:15 gif hi [heora synna] mid onbryrdre heortan [Gode anum]  
*andetteð*  
 'if, with compunction of heart, they confess their sins to God alone'
- (14) a. 92:23 þæt God behet [eallum mancynne] [bletsunge] þurh his cynn  
 'that God promised blessing to all mankind through his kin'  
 b. 292:6 ðaða he *tihte* [þæt Iudeisce folc] [to ðæs Hælendes slege]  
 'when he instigated the Jewish people to the slaying of the Saviour'
- (15) a. 108:35 and se ðe [fram Gode] *bichð* [to deofle]  
 'and he who inclines from God to the devil'  
 b. 110:12 buton se *Ælmihtiga* Scyppend, seðe [ælcum men] *foresceawað*  
 [lif] be his gearnungum  
 'excepting the Almighty Creator, who provides for every man life  
 by his merits'  
 c. 212:34 þa lareowas on Godes cyrcan, þe plucciað þa cwydas ðæra  
 apostola and heora æftergengena, and mid þam [Godes folce] *gewisiað*  
 [to Cristes geleafan]  
 'the teachers in God's church, who cull the sayings of the apostles  
 and their successors, and with them direct God's people to the faith  
 of Christ'

さて、もし「外置」が個別方式だとしたら(11)即ち(12c)の語順を持つ例が相当数見つかるはずであることを上でみたが、実際には少なくとも Catholic Himilies では(12c)の語順は例外的(約4%)にしか起こらないため、この予測は誤りであるといわねばならない。この議論が正しいとすれば、もし「外置」が古英語の規則として存在するならば、それは個別方式では有り得ず、一括方式でなければならぬということになる。しかし既に議論したように、一括方式は非常に価値のないものであるため、それを主張することはできない。

そこで、個別方式の別の可能性を考えてみよう。いま仮に、なんらかの理由で「外置」を適用するときには動詞以外の全ての要素に適用しなければならない、というゆるい制限があった、と仮定してみよう。この仮定の下では、(12c)が例外的にしか見つからないのは、(11)のような移動はこの制限に違反しているからである、という説明が可能になる。そこで次にこの制限を持った個別方式の可能性を追求することにする。

もしこれが正しいとすれば、「外置」前と後で要素の順番が同じである(16)だけでなく、順番が違う(17)の可能性が許されるはずである。というのは、いま上で述べた制限は移動後の語順には触れていないからであり、もし移動後の語順にも制限を課すとすればそれはもはや個別方式ではなく一括方式とほとんど等価になってしまうからである。逆に言えば、もし(17)が古英語で不可能であるとすれば、その時には従属節 SVO 語順を説明するという理由では「外置」を仮定する根拠は全く無くなってしまふのである。

- (16) [VP α β γ V] → [VP V] α β γ  
 (17) [VP α β γ V] → [VP V] α γ β  
       [VP α β γ V] → [VP V] β α γ  
       [VP α β γ V] → [VP V] γ β α  
       etc.                   etc.

それでは古英語の事実はどのようになっていたのだろうか。先の(12)の例のうち、θ 役割を受ける要素の一つが名詞句であり、もう一つが前置詞句であるような例は54例あるが、それらの語順と例数はそれぞれ(18)に示したものであった。(19-22)はそれらの例文である。

- (18) a. NP PP V...16  
       b. PP NP V...2  
       c. V NP PP...35  
       d. V PP NP...1
- (19) a. 94:7 oðþæt se Alysens com,...and [his gecorenan] [to heofenan rice] *gelædde*  
       'until the Redeemer came,...and led his chosen to the kingdom of heaven'  
       b. 120:22 to ðy þæt he [mancynn] [fram deofles anwealde] *alysde*  
       'in order that he might redeem mankind from the power of the devil'
- (20) a. 32:31 þæt he [of eallum ðeodum] [his gecorenan] *gegaderode*  
       'that he might gather his chosen from all nations'  
       b. 174:27 þæt swa oft swa we [fram ðwyrum mannum] [æning ðing] *þrowiað*, þæt we...  
       'that, as often as we suffer anything from perverse men, we...'
- (21) a. 184:28 þæt he þa *gefylde* [fif ðusend manna] [mid fif hlafum]  
       'that he filled five thousand men with five loaves'  
       b. 234:29 God, se ðe *arærde* [þone lichaman] [of deaðe]  
       'God, who had raised the body from death'
- (22) 14:14 þæt God *gelædde* [to him] [nytenn, and deorcynn, and fugelcynn]  
       'that God led to him the cattle, and brute, and brute race, and bird race'

(18)から明らかのように、θ 役割を受ける要素が名詞句と前置詞句という組合せでは、動詞の位置に関わらずそれらは名詞句・前置詞句という語順を取るのが支配的であった。(しかし前置詞句がθ 役割を受けないものであるときにはそのような制限はないようである。この点については Kató (1985) を参照されたい。)ところで、(18a) では動詞が動詞句の最後に位置し、(18c)では先頭にきているので、これらは「外置」分析の下ではそれぞれが「外置」前と「外置」後の語順を示していることになる。しかし、個別方式によって移動したはずの(18c)の名詞句と前置詞句は、既に明らかであるが、移動する前の形である(18a)と同じ語順

である点に注目されたい。この事実から、個別方式の「外置」には、一つ一つを互いに独立に移動するにも関わらず、一つも残さず移動しなければならない、という上で仮に仮定した制限と共に、移動前と語順が違ってはならない、というもう一つの制限も課せられていたことになる。これでは、先に述べたようにもはや一括方式と等価であり、個別方式を主張する根拠はない、と言わねばならない。そして、その一括方式も既に述べたように、規則として主張するには非常に価値の低いものである。このように「外置」は一括方式としても個別方式としても主張することはできない規則である、というのが本節の結論である。

### 3. 結 論

本稿では、まず Kemenade (1987) で古英語の従属節 SVO 語順の派生に対して提案された「外置」分析を概略し、そのような接近法に対する Koopman (1985) の批判を見た。Koopman は「外置」を門前払いにして深く考察していないため本稿ではそれを補う形でこの規則の予測するところを論じてきたが、「外置」がどのように定式化されたにせよその予測するところはやはり古英語の事実と合わないことが明らかとなった。結論として、(少なくとも Catholic Homilies の) 古英語の従属節 SVO 語順を説明するものとして「外置」を仮定する事はできないということをここで主張したい。

しかし、筆者は「外置」という規則の種類そのものが全く存在しない、ということを経験するものではなく、従属節 SVO 語順を説明するものとしては仮定することはできない、と主張しているのである。従属節 SVO 語順を説明するものとして、筆者は (6) を提案し、Koopman は (5) を提案し、それぞれ共に「外置」によるその語順の派生は否定するものであるが、しかし次に再掲する (15) のような語順を持つ文はやはり一種の「外置」を仮定しなければ説明できないものと思われる。

#### (5) Koopman 型

[vp... V] → V [vp... ]

#### (6) 「無指定」仮説

a. [vp... V]

b. [vp V... ]

#### (15) a. 108 : 35 and se ðe [fram Gode] bichð [to deofle]

'and he who inclines from God to the devil'

#### b. 110 : 12 buton se Ælmihtiga Scyppend, se ðe [ælcum men] foresceawað

[lif] be his gearnungum

'excepting the Almighty Creator, who provides for every man life by his merits'

#### c. 212 : 34 þa lareowas on Godes cyrcan, þe plucciað þa cwydas ðæra

apostola and heora æftergengena, and mid þam [Godes folce]

gewisiað [to Cristes geleafan]

'the teachers in God's church who cull the sayings of the apostles and their successors, and with them direct God's people to the faith

## of Christ'

Kemenade は「外置」を（少なくとも Catholic Homilies では）従属節においても相当な勢力を持つ（(12) の例教に注目されたい）SVO 語順を説明するために仮定した点に誤りがあるのであり、それは(10)のような例外的な語順を説明するためのマイナーな規則として考えられるべきなのである。

## 資 料

Thorpe, B. (ed.) *The Homilies of the Anglo-Saxon Church*, vol. 1. The Ælfric Society, London, 1846. (Johnson Reprint Corporation, New York, 1971)

## 参 考 文 献

- Allen, C.L. (1975) 'Old English modals,' in *UMass Occasional Papers in Linguistics* 1, pp. 99-106.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Kato, K (1985) 'A note on the underlying structure of verb phrases in the Homilies of Ælfric,' *Linguistics and Philology*, 6, pp. 272-85.
- Kato, K. (1989) 'Old English as an SOV/SVO language: *be* and passive verbs,' in *Linguistics and Philology*, 9, pp. 25-36.
- 加藤鉉三 (1989a) 「古英語語順の不自由性」, 人文科学論集 第23号, pp. 149-58, 信州大学人文学部。
- 加藤鉉三 (1989b) 「SOV/SVO 言語としての古英語: *Catholic Homilies* に見られる節中の 'nu' をめぐって」, *IVY* 第22号, pp. 161-95, 名古屋大学英文学会。
- Kemenade, A. ven (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.
- Koopman, W.F. (1985) 'Verb and particle combination in Old and Middle English, in R. Eaton et. al. (eds.) *Papers from the 4th International Conference on English Historical Linguistics*, John Benjamins, Amsterdam.
- Lightfoot, D. (1979) *Principles of Diachronic Syntax*, Cambridge U.P., Cambridge.
- Stockwell, R.P. (1977) 'Motivations for exbraciation in Old English,' in Li, Ch. (ed.) *Mechanisms of Syntactic Change*, University of Texas Press, Austin.